

い。

栽培適地と奨励態度 全道の畑作地帯に適し、赤えん豆「在来種」と全面的におきかえて栽培する。栽培法は「在来種」に準じてよいが、成熟枯凋後の茎が「在来種」よりやや軟かい特性から、適期収穫を励行すべきである。

## 12. 馬鈴しょ

### (1) エニワ (北海22号)

来歴 「エニワ」は、1952年(昭27)北海道農業試験場(作物部普通作物第四研究室)において、「島系267号」を母、「島系232号」を父として、人工交配を行い、1953年(昭28)実生を養成し、同地で選抜を重ねてきた。1958年(昭33)「北海22号」の系統名をつけ、関係道府県へ配付して生産力及び地方適否を試験した。1961年(昭36)優良品種に決定し、農林省に新品種「エニワ」(ばれいしょ農林12号)と命名、登録された。

特性概要 1. 草丈は「紅丸」程度で、よく繁茂する。

2. 茎は太くなく、茎数は少ないが、分枝や側枝の発生はやや多い。茎には着色がみられず、茎翼は直であり、葉色はやや濃い。

3. いもの形状は偏円形で、いもの皮色は淡かっ色で、全面ラゼット状を呈する。

4. いもは中、大粒が多く、粒ぞろいがよい。目は浅く、目の数は中ぐらい、肉色は白い。蒸しいもは粉質で、食味はよい。ただし、中心空洞ができやすく、かっ色心腐も多いので、食用には適さない。

5. 花は白色で、その数は中ぐらい。開花期間は長いほうである。

6. 熟期は「農林1号」程度である。

7. 収量は「農林1号」と大差ない。肥沃地においてよい成績を示す。

8. でん粉歩留りは「農林1号」より1-2%高く、でん粉原料用に適している。

9. 疫病には強く、R<sub>1</sub>遺伝子を保有している。

10. 比較的冷涼な気候に適し、高温乾燥には弱い。

11. 休眠は長い。

栽培適地と奨励態度 北海道一円に適し、排水のよい肥沃地に好適する。二次生長の発生が多いところにも適合する。

試験場名	茎葉枯凋期	茎長	10a 当り		上 い も 平均1個重	でん粉価	試験年次
			上いも重	でん粉重			
北海道農試 (島松研究室)	月. 日 9.12	cm 78	kg 2,911	kg 506	g 102	% 18.4	1957~ 1960
同 (紋別研究室)	9.16	64	2,488	478	(86)	20.1	1958~ 1960
上川支場 (士別試験地)	9.26	87	3,677	705	(103)	20.2	"
北見支場	9.22	91	3,489	658	(113)	19.7	"
十勝支場	9.13	72	3,439	676	96	18.8	"

「紅丸」や「農林1号」程度の栽植密度や施肥量とするのが望ましい。休眠が長いので、浴光催芽や早期培土を行うとよい。塊茎肥大がおそいので、早掘りには適していない。ふく枝が比較的長いので、培土はやや早めに行い、しかも十分かけるようにする。

## (2) ユキジロ (北海30号)

来歴 「ユキジロ」は、1953年(昭28)北海道農業試験場(作物部普通作物第四研究室)において、「ケネベック」を母、「農林2号」を父として人工交配を行い、1954年(昭29)実生を養成し、同地で選抜を重ねた。1958年(昭33)には「島系436号」、1959年(昭34)には「北海30号」の系統名をつけて関係道府県へ配付し、生産力および地方における適否を試験した。1961年(昭36)優良品種に決定し、農林省に新品種「ユキジロ」(ばれいしょ農林13号)として命名、登録された。

特性概要 1.草丈は「農林1号」よりやや高く、良く繁茂する。

2.茎は太く、茎数は少ないが、分枝や側枝はやや多い。茎には淡赤色の着色があり、茎翼は波状であり、葉色は緑である。

3.いもの形状は卵形又は偏卵形で、皮色は黄白色である。

4.いもは大粒が多く、粒ぞろいはよい。目の数は少なく、目は浅い。肉色は白で、蒸いもはや粉質で、肉色に変色することが少なく、食味はよい。いもの冠部に亀裂が発生することがあるが、かっ色心腐はほとんど発生しない。これらのことから、生食用、ならびにマッシュポテトやポテトチップなどの加工食品用に好適している。

5.花は淡紫色で花べんの先が白く、大きさは小さく、数はきわめて少ない。つぼみのうちに落下するものが多い。

6.熟期は「農林1号」とほぼ同じ中晩生種である。

7.収量は、比較的安定し、「農林1号」にやや優ることが多い。

8.でん粉歩留は「農林1号」よりわずかに低く、でん粉粒子も小さいので、でん粉原料用には適さない。

9.疫病には強いほうであり、R<sub>1</sub>遺伝子を保有している。軟腐病には強く、青枯病には弱い。

10.休眠は長い。

栽培適地と奨励態度 北海道一円に適し、排水のよい肥沃なところに好適する。排水不良地や

試験場名	茎葉枯凋期	茎長 cm	10a当り		上いも 平均1個重 g	でん粉重 %	試験年次
			上いも重 kg	でん粉重 kg			
北海道農試 (島松研究室)	9.13	80	3,146	488	132	16.5	1957 ~ 1960
同 (紋別研究室)	9.11	66	2,666	453	(117)	18.0	1958 ~ 1960
渡島支場	9.11	119	3,170	371	102	12.7	1960
上川支場 (土別試験地)	9.25	82	3,977	677	132	18.1	1959 ~ 1960
宗谷支場	9.23	58	2,901	482	99	17.6	1958 ~ 1960
北見支場	9.20	88	4,028	648	125	17.1	"
十勝支場	9.15	64	2,822	449	109	16.9	"

低湿地には適さない。都市近郊などの食用いも生産地帯における栽培に適している。

窒素質肥料の過用をさげ、栽植密度は「農林1号」程度とする。萌芽がおそいので、浴光催芽や早期培土を行うのがよい。培土は、なるべく早めに行い、ふく枝が長いので、土は十分かけるようにする。

いもの肥大は早いほうなので、早掘りもある程度可能である。腐敗いもは、予め貯蔵前に除去する。

### (3) ホッカイアカ (北海41号)

来歴 「ホッカイアカ」は、1956年(昭31)北海道農業試験場(作物部作物第4研究室)において、「2070-ab(31)」を母とし、「島系290号」を父として人工交配を行い、1957年(昭32)に実生を養成したものである。1961年(昭36)「島系455号」、1962年(昭37)に「北海41号」の系統名を付け、地方における適否を検討した。1965年(昭40)優良品種に決定し、農林省に新品種「ホッカイアカ」(ばれいしょ農林15号)として命名、登録された。

特性概要 1. 茎長は「農林1号」よりやや長く、茎数はやや少ない。草姿は開張型であり、分枝が発生しやすい。

2. 萌芽直後の茎葉は黒紫色を呈する。

3. 茎はかっ色ないし紫色を呈し、細い。小葉は小さく、その着生は疎である。葉色は濃緑である。

4. 花は淡赤紫色であるが、開花はまれである。

5. いもは長紡すい形、目は多くて浅い。皮色は赤かっ色で、肉色は淡黄色である。

6. いも着は密で、いも数は多い。粒大は中粒が多く、粒ぞろいはよくない。

7. 枯凋期は「農林1号」よりおそい極晩生種であるが、いもの肥大は比較的早い。茎が直立して分枝が少ない場合は、枯凋が早く、収量が上らない傾向がある。

8. でん粉価は18%以上で、「農林1号」より2~3%高い。でん粉原料用に向いているが食味もよい。

9. 疫病抵抗性遺伝子  $R_2, R_4$  を持ち、レース2・4または1・2・4などが発生しないかぎり罹病しない。

試験場名	茎葉枯凋期	疫病罹病度	10a 当り		でん粉価	試験年次
			上いも重	でん粉重		
北海道農試 道立農試 (岩宇試験地)	月. 日 ・	2.0	kg 3,242	kg 540	% 17.7	1962~ 1964
	9.10	3.5	4,018	713	17.6	1962~ 1963
十勝支場	9.13	1.4	3,193	598	18.7	1962~ 1964
根室支場	10.4	強	2,632	505	20.4	"
北見支場	9.20	1.0	3,338	617	19.4	"
宗谷支場	10.2	2.7	4,066	575	19.4	"
天北支場	9.19	0.1	3,061	550	18.4	"
上川支場 (土別試験地)	*	1.7	4,160	829	20.9	"

注 ・年により霜によって枯凋した年があることを示す。

Yウイルスに罹病するとストリークがみられる。青枯病には強くないが、軟腐病にはやや強い。栽培適地と奨励態度 地域適応性が大と考えられるので、主要でん粉原料地帯にはどこでも奨励できる。しかし、9月に曇天降雨が多く、塊茎の疫病発生が多い地帯では避けたほうがよい。

「紅丸」、「農林1号」などの一部とおき換えられるが、一応晩生品種として取扱い、作付割合は工場操業の点から考え、計画的に決定したほうがよい。地力の高い所で、密植し、やや多肥とするのがよい。

いもの着生は密で掘取りは容易であるが、形が長いので注意がいる。疫病には抵抗性であるが、本品種を侵かすレースの発生があった場合は、従来の品種と同様疫病の防除に努めなければならない。

#### (4) シレットコ (根育3号)

来歴 「シレットコ」は、1958年(昭33)北海道農業試験場(作物部作物第四研究室)において、「北海24号」を母とし、「島系291号」を父として人工交配を行い、1959年(昭34)北海道立農業試験場根室支場でその交配種子の分譲をうけて実生を養成し、以後選抜を加えてきたものである。1964年(昭39)「根系9号」、1966年(昭41)「根育3号」の系統名を付け、関係試験機関および現地で生産力および地域適応性を検討した。1967年(昭42)優良品種に決定し、農林省に新品種「シレットコ」(ばれいしょ農林16号)として命名、登録された。

特性概要 1. 茎は太く、やや高く、緑色を呈し、一部に赤紫色が分布している。草姿は直である。

2. 小葉はやや大きく、その色はややうすい緑色を呈している。

3. 分枝はやや少なく、複葉数もあまり多くはない。

4. 花色は白、開花数は多いが花粉は少なく、自然結果はあまりみられない。

5. いもの形は卵形または偏卵形で、中、大粒が多く、粒ぞろいがよい。皮色は淡黄白、目の深さはやや浅く、外見はやや良好である。肉色は白、中心空洞はほとんどみられない。

6. 枯凋期は「農林1号」よりおそく、「ホッカイアカ」程度の晩生種である。

7. いも着はやや疎で、着生位置がやや深いのが、収穫作業の支障にはならない。

8. 収量はきわめて多く、多肥栽培や、やや密植において増収が期待される。食味は比較的良好である。肉質は粉質である。

試験場名	茎葉枯凋期 月日	生育日数 日	茎長 cm	疫病罹病度	10a当り		上 い も 平均1個重 g	でん粉価 %	試験年次
					上いも重 kg	でん粉重 kg			
根釧農試	(10.9)	143	69	0.3	2,922	493	120	18.1	1963～1966
上川農試	10.3		81	3.3	3,951	678	115	18.2	1964～1966
十勝農試	9.20		84	1.3	3,310	561	119	17.5	"
北見農試	9.29		112	1.0	4,576	703	122	16.4	"
天北農試	10.5		63	1.1	3,690	600	117	17.0	"
天垣支場	9.27		78	2.4	3,424	542	103	16.4	"
北海道農試	9.23		86	0.3	2,910	455	132	16.6	1965～1966

9. でん粉価は「農林1号」よりやや高い。でん粉重は「農林1号」、「エニワ」より多く、「ホッカイアカ」程度である。でん粉の粒子は「農林1号」よりやや大きく、「ホッカイアカ」程度である。

10. 疫病抵抗性遺伝子  $R_1$ ,  $R_2$  を保有し、疫病に対し著しく強いが、これを侵すレースが発生した場合は、従来の品種に準じた防除が必要である。塊茎腐敗は少ない。

Xウイルス病や脊枯病には弱いほうであるが、軟腐病には中ないしやや強い。

11. 休眠は中ないしやや短い。

栽培適地と奨励態度 地域適応性はかなり広いものと考えられるが、とくに道東、道北(根釧、斜網、天北)および後志地帯に好適する。

### (5) ビホロ (北海45号)

来歴 「ビホロ」は、1959年(昭34)北海道農業試験場(作物部作物第四研究室)において、「北海29号」を母とし、「Hochprozentige」を父として人工交配を行い、実生養成後選抜育成したものである。1965年(昭40)「島系475号」、翌年「北海45号」の系統名を付け、地方における適否を検討した。1969年(昭44)優良品種に決定し、農林省に新品種「ビホロ」(ばれいしょ農林17号)と命名、登録された。

特性概要 1. 草姿はやや開き、茎長は「農林1号」より長く、茎数は4本前後であるが、分枝が多く、茎は太くて強壯である。

2. 茎色は緑で、一部に赤紫色の着色がある。葉色はやや濃い。

3. 小葉の幅はややせまく、着生は普通である。

4. 花色は淡青で、花数は多く、花粉も多い。

5. いもは球に近い卵形で、その着生はやや疎で、位置はやや深い。形は整一であるが、粒ぞろいはよくない。皮色は淡かっ色で、ラゼットがあり、目の深さは中で、外見はだいたいよい。

6. 極晩生種で、通常10月上旬の霜により枯凋する。

7. 疫病抵抗性主働遺伝子をもたないが、茎葉の疫病にはきわめて強く、無防除栽培でもかなりの収量をあげることができる。

8. 開花期前後に上位葉が内側に巻くが、これはウイルス罹病によるものではない。

9. でん粉価がごく高く、26%ぐらいである。

10. いも重は多くはなく、また多肥栽培での増収効果も大きいとはいえない。しかし、年次変異は少ない。

11. でん粉重は高く、「農林1号」の33%増を示す。

12. でん粉粒子は、従来の品種に比べて格段と大きい。

13. Yウイルスに罹病するとストリークが発生し、軟腐病にはやや強く、脊枯病には弱いようである。塊茎にはかっ色心腐その他の変色がやすい。

栽培適地と奨励態度 天北、上川北部、網走、十勝などのでん粉原料地帯に適する。

既往の「ホッカイアカ」や「シレットコ」などよりでん粉重が上回り、疫病に対する広義のほ場抵抗性をもつため、より安定した収量が得られることなどから、これら2品種の大部分と徐々に交替していくべきものと考えられる。

極晩生で、いもの肥大もおそいため、生育期間の短い地方では能力を十分発揮できない恐れ

がある。

収穫や運搬の際の打撲によって、塊茎内部の変色や傷が目立ちやすく、地域によっては腐敗が多い。このため、種いもの貯蔵や取扱いには特に注意しなければならない。

試験場名	茎葉枯凋期	生育日数	茎長	10 a 当り		上 い も 平均1個重	でん粉価	試験年次
				上いも重	でん粉重			
北海道農試	月、日 ・	日 —	cm 93	kg 2,744	kg 696	g 106	% 26.3	1966 ~ 1968
天北農試	・	—	65	2,606	686	92	25.5	1967 ~ 1968
北見農試	・	—	131	3,709	812	112	22.9	1966 ~ 1968
上川農試	・	—	86	3,165	813	101	26.7	1967 ~ 1968
中央農試	9.25		82	2,975	698	76	24.6	"
十勝農試	10.4	121	93	2,720	689	83	26.0	1966 ~ 1968
根釧農試	10.4	117	72	2,094	532	70	26.4	1967 ~ 1968

注 ・：霜による枯凋のあることを示す。

#### (6) タルマエ (北海47号)

来歴 「タルマエ」は、1960年(昭35)北海道農業試験場(作物部作物第四研究室)において、「オオジロ」を母とし、「Hochprozentige」を父として人工交配を行い、実生の養成と選抜を加えてきたものである。1966年(昭41)「島系479号」、1967年(昭42)「北海47号」の系統名を付け、地方における適否などを検討した。1969年(昭44)優良品種に決定し、農林省に新品種「タルマエ」(ばれいしょ農林18号)と命名、登録された。

特性概要 1.草姿は中程度で、「農林1号」よりやや開いている。

2.茎長や茎数は「農林1号」並で、茎には着色がなく緑である。

3.葉色は緑(中)。小葉はやや大きく、着生は密であるが平滑で、やや光沢が感じられる。

4.花色は淡紫で、その数は多い。

5.いもは扁平な長卵形で、その着生は密である。一個重がやや小さい場合がある。皮色は淡かっ色で、目の数は中、その深さも中であるが、退化葉跡の切込みが鋭い傾向がある。いもの外見はやや劣る。

6.熟期は、「農林1号」より早い中晩生種である。

7.いもの肥大は「農林1号」と同様か、または早いが、でん粉価が高いため、でん粉重では常に20~30%上廻っている。

最終的な収量は「農林1号」並で、でん粉価は21%前後である。

8.多肥栽培で増収するが、密植効果は少ない。

9.でん粉粒子は「農林1号」より大きい。

10.疫病抵抗性主働遺伝子を持っていない。ウイルス病には特に弱くはないが、えそ状のモザイクが散発的に発生することがある。軟腐病には弱い。

栽培適地と奨励態度 全道一円のでん粉原料地帯に適応する。現在のでん粉原料用品種は中晩ないし晩生品種で占められているが、でん粉工場の操業上もっと早熟性のものが要望されてい

ることもあり、当初は2割、将来は5割以上を本品種に交替してもよいと考える。

でん粉蓄積はつねに「農林1号」を上回るので、早掘りしてもよい。

初期生育はおう盛で、葉葉も繁茂の傾向にあるので、栽植密度はやや疎とするのが望ましい。疫病に対しては「紅丸」同様の防除をする必要がある。

試験場名	葉葉枯凋期	生育日数	茎長	10a 当り		上 い も 平均1個重	でん粉価	試験年次
				上いも重	でん粉重			
北海道農試	月 日 9.12	日 107	cm 74	kg 3,187	kg 625	g 90	% 20.5	1966 - 1968
天北農試	9.18	109	42	2,777	521	89	19.6	"
北見農試	9.11	97	104	4,084	715	93	18.4	"
上川農試	9.23	113	65	3,825	838	94	22.9	1967 - 1968
中央農試	9.13	105	74	3,988	737	88	19.8	"
十勝農試	9.13	101	74	3,152	579	75	19.0	1966 - 1968
根釧農試	9.24	98	53	2,491	512	65	21.6	1967 - 1968

#### (7) ワセシロ (根育11号)

来歴 「ワセシロ」は、北海道立農業試験場根室支場において、1962年(昭37)「根系7号」(「威南白」×「島系277号」)を母とし、「北海39号」(「オオジロ」×「96-56」)を父として交配し、真正種子を得、翌年実生を養成したものである。1967年(昭42)「根育11号」の系統名をつけ、地方における適否を検討した。1974年(昭49)優良品種に決定し、農林省に新品種「ワセシロ」(農林20号)と命名、登録された。

特性概要 1. 茎長は「男爵いも」より高いが、低い方に属し、草姿はやや開いている。茎には淡紫色の着色があり、茎葉はやや波状を呈する。

2. 小葉は大きく、その色はややうすい緑色を呈している。

3. 茎は太く、茎数及び分枝は少ない。

4. 花色は紫で、日が経つと淡くなる。

5. いもの形は偏卵形ないし偏球形どあり、皮色は淡黄白で、「男爵いも」より白く、目の深さは中で「農林1号」程度である。いも肌は滑である。外見はよい。中心空洞はほとんどみられない。

6. 葉葉の枯凋は、「男爵いも」に比べ疫病に強いいため数日おそいが、早生種に属し、いもの肥大からみるとむしろ早い。

7. いも着は中で、ふく枝の離れはよい。

8. いもの肥大が早く、早生としてはごく多収である。粒ぞろいはよく、大粒が多い。

9. でん粉価は「男爵いも」より約1%高く、15%前後である。

10. 肉質はやや粉質で、煮上がりが早く、煮くずれは中である。比較的早期から調理特性(ポテトチップなど)の向上をみ、食味がよく、「男爵いも」同様各種の用途に使用可能である。

11. 早掘りでは密植により増収するが、施肥量や栽植密度の影響はうけ難いほうである。

12. 疫病抵抗性因子R<sub>1</sub>をもっているため、疫病的初発生は「男爵いも」より数日おくれるが、疫

病防除、収穫、貯蔵などについては、同品種に準じた管理を行えばよい。

軟腐病、塊茎腐敗、ウイルス病の発生などは一般品種並であり、ウイルス病の中では主として葉巻病が発生し、Yモザイク病が少ない。

乾腐病、ネグサレセンチュウには弱く、夏疫病、菌核病には中ないしやや弱い。

13. 休眠はやや長い。

栽培適地と奨励態度 食用として北海道全域に適応する。

「男爵いも」に比較し、肥大が早く、早く出荷できる。大いもが多いが、中心空洞がなく、水煮後の黒変が少なく、加工歩留も高いため、生食用、ポテトチップなどの油加工用などに好適している。

栽培管理は「男爵いも」に準じて行い、市場の好みに合わせて粒大を調節する場合は、栽植密度を加減して行うようにする。

試験場名	茎葉枯凋期	茎 長	10a 当り		上 い も 平均1個重	でん粉価	試験年次
			上いも重	中いも以上重			
根 釧 農 試	月. 日 9. 10	cm 62	kg 2,985	kg 2,648	g 105	% 15.4	1967 ~ 1973
中 央 農 試	9. 5	59	3,592	3,180	108	14.5	1969 ~ 1973
上 川 農 試	9. 14	63	3,746	3,468	129	16.6	1970 ~ 1973
北 見 農 試	9. 9	91	4,135	4,255*	153	15.2	1969 ~ 1973
十 勝 農 試	9. 3	64	3,207	3,004	114	16.7	"
北 海 道 農 試	8. 28	59	2,806	2,719	140	16.3	"

\* 1970～1973年の平均。

#### (8) トヨシロ (北海48号)

来歴 「トヨシロ」は、1960年(昭35)北海道農業試験場(作物部作物第四研究室)において、「北海19号」を母とし、「エニワ」を父として交配したものである。1967年(昭42)に「島系481号」、翌年「北海48号」の系統名をつけ、道内における地域適応性を検討したのち、1976年(昭51)優良品種に決定し、農林省に新品種「トヨシロ」(ばれいしょ農林21号)と命名、登録された。

特性概要 1. 茎長は「農林1号」より短い、草姿はやや開いている。

2. 茎数は中ぐらい、分枝は少なく、茎色は緑で、小葉は緑色(中)であり、やや疎に着いている。

3. 花色は白で、花粉の稔性は低い。

4. いもの形状は偏球形ないし偏卵形で、皮色は淡黄かっ色で、弱いラセットがある。

目は浅く、その数は中で、肉色は白い。いもは大きく、粒ぞろいはよい。いも着は中である。

5. 肉質はやや粉質で、煮くずれは中ぐらい、貯蔵後においても調理後黒変は少ない。

6. 還元糖含量は低く、低温貯蔵によって増加する程度も低い。食味は水煮、フライともよい。

7. 休眠はごく長い。

8. 茎葉黄変期は「男爵いも」より約10日おそい中生種である。



9. 疫病抵抗性遺伝子 R<sub>1</sub> を保有し、初発生は「農林1号」よりおくれ、感染後の発病経過ではこれより早い。

10. いも収量は「農林1号」と同程度である。施肥反応性は「農林1号」程度であり、環境条件による収量の変動はやや大きい。

中心空洞が大いもにみられることがあるが、かっ色心腐の発生はみられない。

11. 葉巻病の発生は一般品種並であり、Yウイルスに感染するとストリークを生ずる。

塊茎の疫病による腐敗は「男爵いも」より少ない。

栽培適地と奨励態度 用途は加工食品原料用とし、北海道全域に適應する。

早生種の「ワセシロ」、「男爵いも」に比べると早期肥大性が劣るので、ごく早期の原料としては不適當であるが、「農林1号」の加工食品原料の大部とかわるものである。

栽培管理は「農林1号」に準ずる。やせ地、少肥、乾燥地などでは収量はあがらないことが多いが、肥沃地、多肥では多収となる反面、ごく大粒に奇形や中心空洞を生ずることもあるので、窒素の施用を減じたり、栽植密度を高めるなどの注意が必要である。

疫病の初発生は遅れるが、発病後は十分の防除が望ましい。

浴光催芽は、処理期間を長めて芽に傷をつけることのないようにする。

試験場名	茎葉枯凋期 <sup>o</sup>	茎 長	10a 当 り		上 い も 平均1個重	でん粉価	試験年次
			上いも重	中いも以上重 <sup>**</sup>			
北海道農試	月. 日 9. 5	cm 54	kg 3,052	kg 2,776	g 105	% 17.3	1966 ~ 1975
中央農試	9. 4 <sup>o</sup>	55	4,209	3,849	110	15.2	1968 ~ 1975
根釧農試	9.20	61	3,177	2,891	93	16.3	1967 ~ 1975
十勝農試	9.10 <sup>o</sup>	59	3,492	2,907	86	16.9	"
北見農試	9.13	84	4,907	4,822	123	15.7	"
上川農試	9.12	54	3,605	2,989	101	17.6	"
天北農試	9.12	49	3,371	3,484	97	16.0	1968 ~ 1975

• 霜による枯凋の年を除いた平均。

•• 中いも以上重は、北海道農試以外では測定しなかった年がある。

### (9) ツニカ (Tunika)

来歴 「ツニカ」は、1967年(昭42)ドイツ民主共和国の Gross-Lüsewitz 植物育種研究所において、「Lü56・186/21N」を母とし、「Lü51・183/2」を父として交配後育成したものである。1971年(昭46)北海道農業試験場(作物第一部畑作物第二研究室)に導入し、1974年(昭49)から北海道立中央農業試験場ほかにおいて、ジャガイモシストセンチュウに対する抵抗性、生産力などを検定した後、1978年(昭53)優良品種に決定し、農林省に新品種「ツニカ」(ばれいしょ導入3号)と命名、登録された。

特性概要 1. 茎長は「農林1号」より長く、草姿はやや開いている。茎は中ないしやや細く、緑色である。

2. 小葉の大きさは中ないしやや小であり、葉色は淡緑である。生育中期以降巻葉をみる。

3. 花色は白く、花数、花粉量ともに多く、自然結果も極めて多い。
4. いもは球形に近く、皮色は黄かっ色で、ラゼットがある。肉色は黄で、目の数は中、目の深さはやや深いが尻は浅い。
5. 一個重はやや小さいが、粒ぞろいはよい。塊茎の着生はやや密、ふく枝の長さは中で、その離れはやや悪い。
6. 茎葉枯凋期は晩生種に属する。
7. 収量はやや劣るが、でん粉価が19~20%と高い。でん粉重は「紅丸」より低い。でん粉粒子は大きく、糊化した時の最高粘度が高い。
8. 近縁野生種 *Solanum andigenum* に由来するジャガイモシストセンチュウ寄生型Aに対する抵抗性遺伝子  $H_1$  をもっている。

本品種も幼虫の侵入がみられ、3~4 齢まで発育するが、シストにまで達するものが極めて少ないので、本品種栽培後の土壤中の線虫密度は植付前の20~30%に低下する。線虫密度の高いほ場では、本品種も寄生によって減収するが、「紅丸」に比べてでん粉重が多い。

9. 疫病の初発生、発病経過は「農林1号」に類似している。

Yウイルスの当代感染により、やや小さいストリーク病斑を葉脈に生ずる。

10. 休眠は長く、「エニワ」程度である。

**栽培適地と奨励態度** 本品種の適応地域は道央のジャガイモシストセンチュウ発生地帯とする。

施肥量及び栽植密度は「紅丸」に準ずる。多肥密植すると倒伏しやすく、いもが小粒化し、減収の恐れがあるので注意する。

線虫のいるほ場で生産されたものは、でん粉原料以外には使用しない。

線虫密度の高いほ場では、本品種でも減収するので、輪作、殺線虫剤施用などの防除手段を講じる。

抵抗性品種を連続して栽培すると、抵抗性を破る線虫系統の出現をうながす恐れがあるので、線虫密度の低くなったほ場では、輪作体系の中で抵抗性品種と感受性品種を適宜交替させて栽培する。

試験場名	茎葉枯凋期	茎長	10a 当り		上いも 平均1個重	でん粉価	試験年次
			上いも重	でん粉重			
北海道農試	•	69 <sup>cm</sup>	3,391 <sup>kg</sup>	640 <sup>kg</sup>	95 <sup>g</sup>	19.9 <sup>%</sup>	1975~1977
中央農試	•	—	4,456	714	97	17.3	"
	•	—	2,856	472	85	17.5	"

注 • 枯凋期に達しない年の多いことを示す。中央農試は真狩村における試験である。